

○石川謙氏 著

我國における兒童觀の發達

石川謙氏が日本教育史の權威であることは、更めて記すまでもないが、その不斷の研究の蓄積の中から、兒童觀の發達に關するものを集輯せられたのが本書である。豊富なる文献資料に基いて、わが國古來の兒童觀につき、その重要な諸方面を叙述検討せられ著者の博別と獨創の識見とが、三百七十餘頁の全體に溢れている。學的研究者にとつて、裨益するところ最も多いと共に、一般讀書子に對しても、津々たる興味つき難きものあるを信ずる。

その有益と興味とは、次の目次の一部だけによつても、うかどわれ得るで

あろう。

第一篇	我國における兒童觀の發達
第一章	中世における兒童觀
第一	兒童觀の問題
第二	兒童期の確認
第三	入學年齡と學習年限
第四	兒童觀の發達と兒童教育
第二章	近世における兒童觀
第一	法規から見た江戸時代の兒童問題
第二	兒童觀と兒童文化
第三	學習年齢の沿革と落學の教育

第三章	兒童觀の發達と幼兒教育
第一	兒童發育の法則に順應する教育についての理論
第二	兒童觀をめぐる民間の知性と愛欲
第四章	兒童自治の教育施設として見た什人組制度
第一	學徒什人組の本領と會津藩の教育
第二	什人組の組織
第三	什長の選任と任務
第四	集團生活の訓練と什人組
第二章	教科書史上における實語教、童子教の地位
	(以下略)

問題そのものゝ興味は、更著者の細緻な筆致によつて、讀者をして感興深く問題の在りかたに觸れずにはおしめ、史的考察を通して、われらの兒童觀そのものにつき三思せしめずには措かない。まことに教えられ、考えさせられるところ限りない好書である。

(東京都千代田區神田駿河臺・振鈴社發行・定價金四百圓)